

編集後記

今月号の巻頭言の坂口氏の論陣はなかなか面白い。かねてからこのような哲学をお持ちの同氏が心身障害児総合医療療育センターの責任者におなりになっていることは、非常に正直に意見を出しておられるという点で理解出来る。多くの整形外科医はこのような考えであろうし、また内科医にとってもその専門のジャンルがあるであろう。要は臨床科の枠を超えた内科、整形外科などと呼ばない協力体制と境界領域かもしれないが学問的体系の確立が意義の深いものになっている。世界的に見てもアメリカ流にやっていないところもあるし、そのアメリカの中でもいろいろあるのである。しかし本邦のリハビリテーション医学と医学的リハは健全に発展して来たといえるのではないか。

それはさておき、特集ではリハビリテーションと法律を採り上げた。法治国家である以上法律に照らした行政の中にリハビリテーションも組み込まれて行くのであるが、実際現場で患者さんと相対する我々が福祉関係、リハ関係の法律知識を十分持ち合わせていな

い。法律は無味乾燥とはいえ運用の仕方により妙味もある故に最少限の知識は持つべきである。そのような意味から、医師で法律知識の最も豊富に持っている今田氏を引っ張り出し、体裁を整えてみた。板山氏、五味氏、緒方氏、磯部氏と力作が並んだわけである。

川平和美氏らの患者家族の心理が人間関係の密接度に関連して影響を受けるという研究報告はなるほどと思われる事柄であるが、現在あちこちで直面している重要な社会問題を示唆している。

講座は四肢のCTに入ったが筆者の吉田は現在骨格筋の絶対筋力の問題に取組んでいる。臨床脳波検査の基礎に關しての江部氏の講座も入門からデータ処理に到るまでわかり易く解説されている。

年々盛大となりつつある日本リハビリテーション医学会の印象記は津山氏により報告され、本号もまた自画自賛でどうやらまとまったものになった。

なお症例報告の投稿を歓迎する。

(大井 淑雄)

次号予告(第11巻 第11号)

特集 下肢装具

下肢装具製作法の動向—日本の現状と

Lehneis 法について……………横市大 大川 嗣雄・他

プラスチック下肢装具の動向……………佐賀医大・整形外科 渡辺 英夫・他

片麻痺の下肢装具

—適応に関する諸問題……………中伊豆リハセンター 窪田 俊夫・他

対麻痺の下肢装具

—対麻痺の歩行訓練について……………九州労災・リハ 吉村 理・他

靴の機能と適合性……………慶大・理工学部 山崎 信寿

巻頭言 老人医療とリハビリテーション……………中伊豆温泉病院 齋藤 幾久次郎

研究と報告 脳卒中患者が自宅退院するための

医学的・社会的諸条件……………代々木病院 二木 立

症例報告 大腿切断肢に骨折を生じた

2 症例……………慶大月が瀬リハセンター 里 宇明元・他

紹介 オーストラリア・The Spastic Center of
N.S.W. 方式による“Sounds and Symbols”

について……………南大阪療育園 広川 律子

講座 CT(11) 四肢・(その2)……………自治医大・整形外科 吉田 輝明・他

脳波とリハビリテーション(2)

脳卒中と脳波検査……………浴風会病院 大友 英一

一頁講座 スプリント(11) リウマチのスプリント

(その2)……………七沢病院 岡崎 健

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
杉 山 尚
砂 原 茂 一
津 山 直 一
水野 祥太郎
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
江口 壽榮夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
加倉井 周一
賀 集 竹 子
河 邨 文 一郎
小 島 蓉 子
五 味 重 春
齊 藤 正 也
齊 藤 澄 子
澤 村 誠 志
高 田 玲 子
高 橋 勇
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
橋 倉 一 裕
長谷川 恒雄
林 玉 子
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田, 山田)